難聴のある超高齢者の支援をどうすすめていくか

スーパーバイザー

野中　猛（日本福祉大学教授）

事例提出者

Bさん（居宅介護支援事業所・介護福祉士）

クライアント

クライアント：C氏（97歳・男）、要介護4

診断名：脳血管性痴呆

治療歴：平成15年11月　完全房室ブロック（ペースメーカー手術拒否）

生活歴：本家の長男として地元に生まれる。実家は代々農家を営む。中学校卒業後、会社員として長年勤務。3男2女を育てる。80代に入って次女と同居（C氏の住居に次女一家が同居する）。平成15年9月、物忘れが著明になり、長女（同市内居住）夫婦の家で同居することになる。妻は10年ほど前に亡くなっている。

ADL等の状況：

・食事：用意されたものを自力で摂取できる。
・移動：基本的に椅子で生活している。畳に座るのは困難。
・排泄：自力で行えるが、リハビリパンツを頻回に汚す。
・入浴：自力で毎日（入浴が好きである）。
・更衣：自分では行わず、手伝いが必要。
・行動：昼夜逆転・暴言・介護抵抗がある。荷物の整理を延々としていることがある。

対人関係：

・難聴のためコミュニケーションは筆談で行っており、意思疎通がしにくい。
・日常的なコミュニケーションはできる。
・難しいことは判断できない。
・他人が話していることが気になり、不満を抱きがちである。
・担当ヘルパー等の区別がつかない。

本人の性格：

・正義感が強い
・神経質なところがある
・基本的には穏やか

本人の希望：

「外に出たい」「前の家に帰りたい」

介護者：

長女（主介護者）

介護内容：

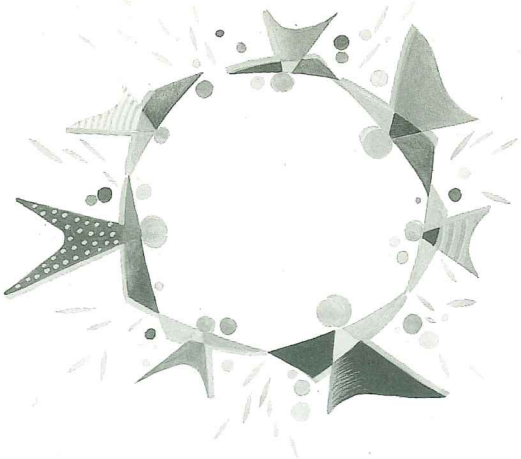
・食事をつくる
・月2回は本人を連れて外出する（通院同行時）
・入浴時、パンツや衣服を取り替える
・夜間の介護

利用中のサービス：

・訪問介護（2回／日・各30分、安否確認・食事介助）

介護者の困りごと：

・昼夜逆転しており、主介護者（長女）は疲れ切っている
・筆談に手間がかかる
・一人で外出してほしくない



全国各地で行われている事例検討会の模様を誌上で再現します。検討会及び事例の内容は、プライバシー保護の観点から、全体の趣旨に差し支えない範囲で変更させていただきました。

ケース検討会

野中　ありがとうございました。長女夫婦と同居している97歳の超高齢者の男性の事例です。これからCさんを支えていくためには、どんな支援を行えばよいのか。まずは、Bさんからの報告に加えてどういった情報があればよいか、自分の価値観を交えずに事実を聞いていってください。見立てのための情報がある程度そろったところで、具体的なプランニングに移りたいと思います。

それでは、質問をどうぞ。

ケースの全体像をつかむ（見立て編）

認知症の状態とコミュニケーション能力について

発言　現在は長女夫婦のところに同居しているということですが、どのような住宅なのですか。

Bさん　2LDKの賃貸アパートです。Cさんと長女夫婦が一部屋ずつ使っています。

発言　長女夫婦には子どもはいないのですか。

Bさん　いません。

野中　長女夫婦の年齢は？

Bさん　夫が65歳で妻が62歳です。昼間は二人ともパートをしており、Cさんは日中独居になります。

発言　ご本人の行動として「荷物の整理を延々としていることがある」ということですが、もう少し説明していただけますか。

Bさん　次女宅から長女宅に移る際に、ご本人の荷物を一式持ってきましたので、かなりの荷物があるのですが、タンスの中の物や服を出したりしまったりしていることがあります。

野中　それは作業譫妄ではなく、目的があってしている行為なのですか？

Bさん　明確な目的はわかりませんが、譫妄ではないと思います。

野中　服は季節に合ったものを着ていますか？

Bさん　まだかかわってから5カ月ほどですが、不自然な感じを受けたことはありません。

発言　主治医は何科ですか？

Bさん　精神科です。

発言　今、通院はしているのですか？

Bさん　長女が2週間に1回、車で送り迎えをしています。

野中　薬は何をどのくらい飲んでいますか？

Bさん　安定剤ということしかわかりません。

野中　認知症の方がどんな薬をどれだけ処方されているのかは、基本的な情報として把握しておく必要がありますよ。

Bさん　はい、以後気をつけます。

発言　Cさんは難聴と認知症があるということですが、意思の疎通はどれくらい図れるのですか？

Bさん　筆談が中心ですが、日常的な食べる、寝る、出かけるといった内容なら理解できます。ただ、少し込み入った内容になるとわかりにくいところはあります。

野中　認知症の程度は？　医師はどんなふうに説明していましたか。

Bさん　「難しい判断になるとできない」という程度の説明です。

野中　それでわかりますか？

Bさん　う〜ん、なんとなくは……。

野中　なんとなくの理解だと、援助もなんとなくしかできませんよ（笑）。やはり、もう少し詳しく医者に説明してもらわないと。

Bさん　はい、これから気をつけます。

発言　難聴については、補聴器の使用は検討されたのでしょうか？

Bさん　ご本人がうまく使えず、気になってしかたがないようで、すぐはずしてしまうそうなんです。ですので、使っていません。

野中　使わなくなったのはいつ頃ですか？

Bさん　80代の頃から使っていないそうです。

野中　ということは、15年くらい前の話ですね。

Bさん　はい。

野中　あなたは補聴器の専門家ですか？

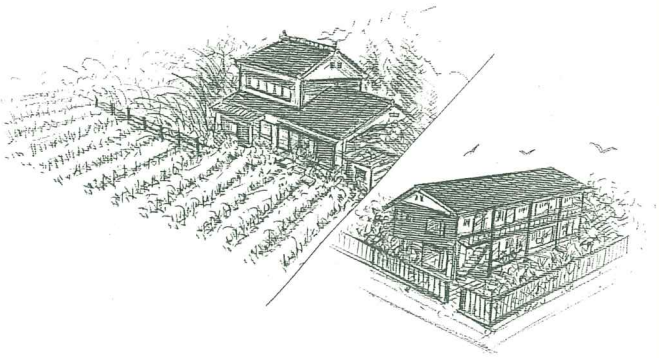
Bさん　いいえ。

野中　補聴器の世界も日進月歩ですからね。おそらく、日本の補聴器は世界でも最先端をいっているはずですよ。15年前の状態のまま放置してはいけません。最新情報を知らずに利用者が不適切な選択をしていたとしたら、それは明らかに情報を提供しない専門家が悪いのです。もちろん、最終的な判断はユーザーがくだすわけですが、できる限りの情報は渡さないといけません。

Bさん　はい。

日常生活について

発言　Cさんは入浴は一人でしているようですが、洗身・洗髪などの手伝いは要らないのですか？



Bさん　その点は懸念事項の一つで、ご家族としても気にかかっているところなのですが、ご本人は頑固で手伝いをさせないそうなんです。ですので、長女が見守りをしているのが現状です。

発言　排泄時の汚染が頻回にあるということですが、どのくらいの頻度であるのですか？

Bさん　お小水は基本的に自分でトイレに行っていますが、パンツを汚してしまうことが多いようです。失敗する割合までは正確にはわかりません。

長女夫婦との関係について

発言　暴言があるということですが、誰に対してあるのですか？

Bさん　主に長女の夫に対して暴言が見られます。自分が自由に外出できないのは長女の夫のせいだと思っておられますので。

野中　具体的には、どんな言葉なのですか？

Bさん　「お前が外に出してくれないから、俺は中にいるんだ」などです。

野中　そのくらいだったら暴言というほどではないでしょう。

Bさん　難聴があるので声はかなり大きいのですが、警察を呼んだりするほどではありません。

野中　十分ジェントルマンですよ（笑）。そういった言葉を、長女の夫はどのように受けとめているの

ですか？

Bさん　言い方は悪いですが、聞き流すというか、相手にしていない感じです。

野中　それで済むわけですね。包丁を持ち出したりといったことは起こらないんですね（笑）。

Bさん　はい、それは大丈夫です。

発言　長女は疲れているということですが、どのようなことが大変なのでしょう。

Bさん　時々、Cさんが夜眠れない時に呼ばれるらしく、Cさんが眠るまで長女が添い寝をしているそうなんです。「夜中に起こされると、その後自分が眠れなくなってしまう」とおっしゃっていました。

野中　添い寝の時間は？

Bさん　1時間くらいです。

野中　週に何回くらい添い寝をしなければいけないんですか？

Bさん　週に1回くらいだそうです。

野中　長女はどれくらい苦しいのですか？　「もう耐えられない！」というくらい？

Bさん　長女自身は「なんとか大丈夫です」と話していますが、夫のほうが長女の体調を心配しています。

野中　夫はCさんの介護については、どんなかかわり方をしているのですか？

Bさん　「最終的な判断はお前がすればいい」と長女に言っていますが、デイサービスとかショートステイなどのサービスを使ったらどうかと提案しています。

野中　強引に介入するわけではないんですね。

Bさん　はい。

本人の希望と生活歴について

発言　ご本人はもともと住んでいた家に帰りたいという希望をもたれているようですが、そもそも長年住んでいた自分の家を出て長女夫婦と同居したのはなぜなのですか？

Bさん　次女夫婦は共働きで、もともと仕事をしながらご本人の面倒をみるのは大変だったようなんですが、直接的なきっかけとしては、Cさんが次女の息子さんを泥棒呼ばわりするようになったらしいんです。それが決定的だったと聞いています。

野中　長女ではなく次女が本家に住んでいる理由は聞いていますか？

Bさん　おそらく、長女の夫が「長男」だからだと思います。

野中　Cさんが長女夫婦と同居するのは、どのように決まったのですか？

Bさん　Cさんには3男2女の5人の子どもがいるのですが、全員の会議で決めたそうです。

野中　その時点では、Bさんのかかわりは？

Bさん　まだです。私がかかわったのは、長女夫婦と同居して半年くらい経ってからです。

野中　かかわるきっかけは？

Bさん　長女の夫が相談に来られました。

野中　なるほど。長女の夫は自分でも動いてくれる人なんですね。

発言　ご本人の希望が「外に出たい」となっているのは、どういう理由からですか？

Bさん　長女夫婦の意向で、家の中にいる時間が多いためだと思います。次女の家に行きたいという気持ちもあると思います。ただ、長女夫婦は昼間外に出るクセがつくことを警戒されています。

発言　長女夫婦がCさんを外に出さないようにしようと思ったきっかけは何だったのですか？

Bさん　以前、ご本人が昼間に外を一人で歩いている時に、通りがかりの人がCさんの様子を不自然に感じて、警察に連絡して保護されたことがあったそうなんです。

野中　そういうことが何回かあったのですか？

Bさん　いえ、１回だけです。

野中　１回で、もう外に出さないんですか。

Bさん　ええ、玄関に棒を差して。

野中　（驚いて）玄関に棒!?

Bさん　はい。長女夫婦がどうしても、とおっしゃるので……。

野中　あなたには、おじいちゃんはいますか？

Bさん　はい。

野中　自分のおじいちゃんにも、同じことをできますか？

Bさん　いいえ、しません。

野中　Ｃさんは他人だからどうでもいいのですか？

Bさん　長女夫婦には再三必要性がないことは説明したのですが、ご夫婦の意向が強く、最終的に今のようなかたちになっています。

野中　今後どうしていくかは、後でプランニングの時に考えていきましょう。

発言　Ｃさんの奥さんが亡くなった時、次女の家族とは同居していたのですか？

Bさん　はい。すでに同居していました。

野中　奥さんはどうして亡くなったかについては聞いていますか？

Bさん　病死、としか聞いていません。

野中　どういう経緯で亡くなったかによって、残されたＣさんや子どもたちがどんな時間を過ごしてきたかも違ってきますよね。急に亡くなったのか、10年間介護を続けた末だったのか――。そこを知ることで、ご本人たちに対する理解の度合いもずいぶん変わると思いませんか？

Bさん　たしかに――。ただ、なかなか深く相手の事情を聞くのが難しくて……。

野中　要はこちらがどれだけ真剣になるかですよ。もちろん、あなたも真剣に仕事をしているとは思いますよ。でも、もしＣさんが自分のおじいちゃんだったら、もう少し違ったでしょう。「このおじいちゃんをこのままにしてはいけない！」という気持ちが先にこなければ、どんなに技術があってもダメなんです。本当に聞きたいという気持ちがあれば、方法は後からついてきます。

Bさん　わかりました。肝に銘じます。

家族の状況について

発言　長女の夫はもともとどんなお仕事をしていたのですか？

Bさん　会社員だったそうです。

野中　何の会社？

Bさん　そこまでは聞いていません。

野中　もしかしたら紙おむつの会社かもしれませんよ（笑）。「会社員」で流してはいけません。何がＣさんの援助に使える社会資源になるかわかりませんからね。

Bさん　はい。

野中　次女のほうも同様かな？

Bさん　はい（苦笑）。ご家族の仕事を根掘り葉掘り聞くのもどうかな、と思いまして……。

野中　聞く側が「援助に必要な情報」だとしっかり認識できていれば、それは根掘り葉掘りではないんですよ。

Bさん　なるほど……。

野中　ところで、長女夫婦の自動車の種類はわかりますか？

Bさん　軽自動車です。

野中　あまり経済的に余裕がある感じではありませんね。

Bさん　はい。ご夫婦の生活はお二人の収入でかつかつなので、介護保険の費用はＣさんの年金から出しています。

野中　年金の種類は？

Bさん　国民年金です。月８万円の年金のうち、２万円を食費、２万円を介護保険、残りをお葬式代と、５人の子どもたちで協議して決めたそうです。

野中　子どもたち同士はわりと頻繁に会っているのですか？

Bさん　毎月１回、きょうだいで会われています。

野中　その会を仕切っているのは誰ですか？

Bさん　長女の夫です。

野中　なるほど。やはり、長女の夫がキーマンなんですね。

具体的な対応策を考える（手立て編）

野中　では、プランニングに移りましょう。長女夫婦と同居している97歳の超高齢者Ｃさんに対して、これからどんな援助をしていけばいいでしょう。自由にアイデアを出してください。

残りの人生をどう過ごすか

発言　ご本人が一番何を望んでおられるのか、それを知りたいと思いました。

野中　そうですね。一番大事なことですよね。もう97歳です。これから、どのように残りの人生を過ごしたいのか、筆談ででも聞くことです。

Bさん　はい。

発言　ちょっと抽象的なんですが、Ｃさんの趣味や嗜好を探して、少しでも達成感や充実感を味わっていただけるようにするというのはどうでしょう。

野中　大事ですね。せめて元気だった時、30代、40代、50代をどう過ごしてきたか。どんな喜びがあったかを聞くことでしょうね。そこから、今につながる趣味・嗜好が見つかるかもしれません。ご本人が最も輝いていた時代の話を聞くことは、利用者と関係をつくる上でも重要です。女性だったら、結婚した時など一番綺麗な時代の話。アルバムを見せてもらうのもいいですよね。利用者にしてみても、自分の華やかなりし頃のことを知ってくれているケアマネジャーと、年老いて身体が動かなくなった状態しか見られていないケアマネとでは、どちらにより親しみを覚えるかは明白ですよね。ケアマネジャーは、身体が動かなくなってから相手に出会う職業ですが、そうであるからこそ、元気な頃、輝いていた頃の話を聞くことが大切なんです。

Bさん　わかりました。

発言　ご本人の実家に帰りたいという思いを何とか実現させてあげたいと思いました。

野中　本家の長男ですからね。しかも97歳です。Ｃさんの「家に帰りたい」という言葉の重さを感じる感性をケアマネジャーはもたなければなりません。Ｃさんが実家に帰るためには、次女たちの側の同居の条件を確認しておく必要がありますね。

外出の機会をどう確保するか

発言　ご本人は外に出られないことで精神的ストレスを感じていると思います。どうにか工夫できないでしょうか。

野中　長女夫婦は棒を差してでも「出したくない」と言っています。どうすればいいでしょう。

発言　長女夫婦と話し合いの機会をもつ。

野中　そうですね。次のケアプランの見直しはいつですか？

Bさん　2カ月後です。

野中　そこが一つのチャンスですね。外出に消極的なのは長女の夫です。そして、このケースの最大のキーマンもどうやら長女の夫のようです。彼の信頼を勝ち得るかどうかが大きなカギですね。

発言　外出の際の見守りなど、近隣の方のご協力などは得られないのでしょうか。

Bさん　長女夫婦は長年この地域に住まわれていて、近隣との関係も良好です。Cさんと同居を始めるに当たっても、めぼしい方には事情をお話ししたそうです。

野中　ほう。誰がそれをしたのですか？

Bさん　長女の夫です。

野中　やっぱり、長女の夫は相当の力をもっている人ですね。じゃあ、近所の人は認知症のCさんが同居していることを知っているんですね。

Bさん　はい。

野中　しかも、警察に1回保護されていますから、きっと警察のリストにも載っているでしょう。そういう条件はそろっているわけだ。

発言　先ほど、主治医の先生に認知症の度合いを聞くという話がありましたが、外出の可能性や留意点などを先生からご家族に説明していただくというのはどうでしょう。

野中　いいアイデアですね。権威を持っている人間をうまく使うというのは、一つの方法です。「Cさんの認知症はこの程度ですから、こういう点に注意してください。外出を止めるなんてもってのほかですよ」とドクターに言ってもらえば、かなり効果があるでしょう。

医療面のフォローについて

発言　既往歴にある完全房室ブロックの状態が現在どうなっているのか、確かめておく必要はないでしょうか。

野中　大事です。ドクターから説明を受けておく必要がありますね。いざというときのリスクマネジメントのためにも、きちんと医師に確認をとって、それを記載しておくことが大切です。できますか？

Bさん　通院時に何度か同席したことはあるので、顔は覚えてもらっていますが、正直、お医者さんにはちょっと苦手意識があります。

野中　ちょっとじゃないな（笑）。でも、ケアマネの仕事をまっとうするためには、避けては通れない

道です。医者だって忙しいですから、欲しい情報だけをメモに書いてお願いすればいいんですよ。Cさんの場合、余命・認知症・外出・心臓の4項目ですよね。これを書いてメモを渡せば、答えてくれるはずです。

Bさん　はい、頑張ってみます。

発言　今の話にもつながるのですが、Cさんはベースに疾患をもっていらっしゃいますので、訪問介護だけでなく訪問看護を導入すれば、主治医とのコンタクトもとれますし、余命や認知症の状況なども適切に判断できると思うのですが。

野中　たしかにそうですね。これまでの在宅での経過をみると、医療面を責任もって見ることができる人がいませんでしたよね。費用面の問題もあるでしょうが、導入の可能性を検討してみる価値はありますね。

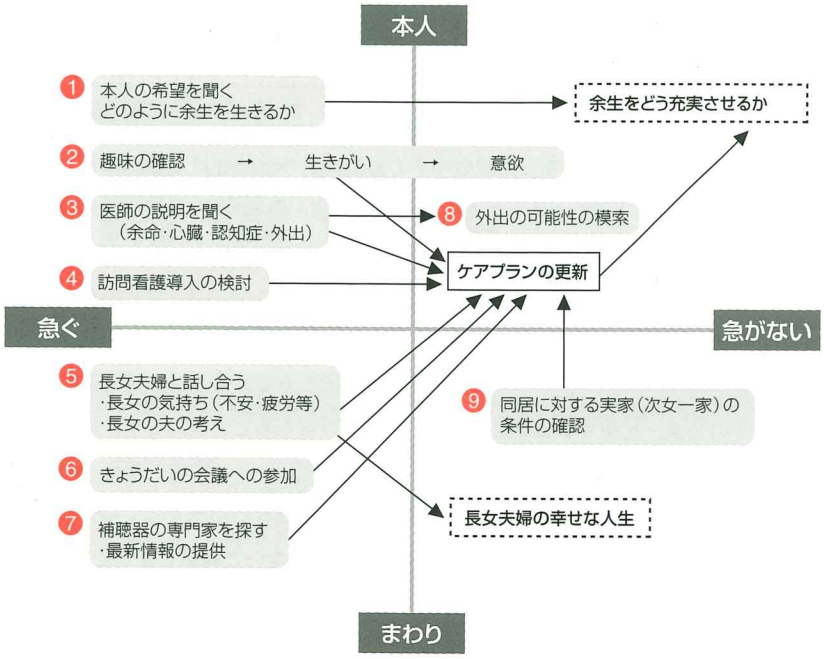
発言　排泄の失敗に関してですが、ふだんは椅子の生活をしているということですから、ポータブルトイレの導入を考えてはいかがでしょう。

野中　どうですか、Bさん。

Bさん　まだトライしたことはないのですが、いいかもしれません。

長女への配慮と信頼獲得

発言　私は長女夫婦の負担についても配慮をしたいと思いました。

野中　何といっても一番苦労している人たちですからね。ケアマネジャーとしては、どんな大変さがあり、どんなことを心配しているのかをきめ細かく聞いていくことが大切ですね。そして、長女をしっかりと支えることによって、長女の夫からも信用してもらえるようになるでしょう。長女の夫がこのケースのキーパーソンですから、彼の信頼を勝ち得るかどうかが大きな分かれ道です。信用を得ることができれば、きょうだいの会議にもスムーズに参加できるでしょう。いずれにしても、こうしたさまざまなことに取り組みながら、2カ月後のケアプラン更新につなげていきましょう。どうですかBさん、できそうですか？

Bさん　至らないところばかりで恥ずかしかったですが、今日アドバイスいただいたことを一つひとつ実践に活かしていきたいと思います。まずは2カ月後のプラン変更に向けて頑張っていきます。ありがとうございました。